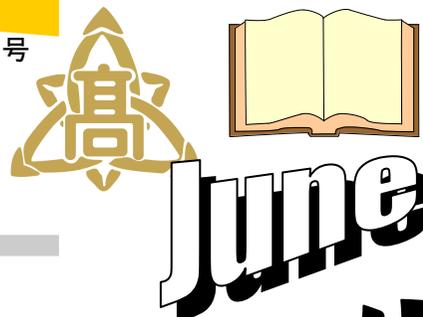




らびらびら



# 特集 1年生紹介文より

## ■河合隼雄『いじめと不登校』(新潮文庫)

21R 石原瑠嗣

「見守るといのは、責任を育てるいちばんいい方法なんです。あなたに責任があると思っているから見守っているんです(本文より)」この本では、このような文章などが書いてあるので、教育のあり方や方法などを知ることができるし、子どもと悪の関係性などを知って自分がどうあるべきかを考えることができるし、大人は子どもとどのように接すべきかを、この本を通じて考えることができると思います。➤➤➤

## ■森 絵都『カラフル』(理論社)

21R 岩佐 実旺

死んだはずの僕の魂は今、小林真という少年の体を借りて生きている。死んで自分の死んだ記憶を失った僕は、思い出すために服毒自殺して死んだ小林真に潜り込むことになったのだ。僕は大きなあやまちを犯して死んだ魂だ、そしてプラプラという天使に生まれ変わる再チャンスを与えられるのだ。果たして僕は小林真として生きられるのか、過去を思い出すことができるのか。最後は衝撃的な結末が待っています。➤➤➤

## ■橋口いくよ『僕の初恋を君に捧ぐ』(小学館)

21R 客野里歩

「僕の人生にはタイムリミットがある。もちろん誰の人生にもタイムリミットはある。僕にはそれが人より早いだけだったこと。僕は最低な約束をしてしまった。守れない約束をしてしまった。だって僕は二十歳まで生きれないから。(本文より)」なにげなく過ごしている毎日がどれだけ大切か、この本を通じて考えさせられました。毎日は普通に過ごしていることに感謝して1日1日を大切に過ごしていけないといけないなあと思いました。➤➤➤

## ■長谷部 誠『心を整える』(幻冬舎)

22R 安達雅人

「遅刻というものはまわりにとって、自分にとっても何もプラスを生み出さない。まず、遅刻というのは相手の時間を奪うことにつながる。20人で集まるとする。そこに僕が5分遅れたら、20人で100分待たせることになる。(中略)だから僕は遅刻をする人を信頼できない」僕も時間にルーズな人は嫌いです。時間というものには資源です。相手の資源を奪うことはドロボーです。僕はこれからも決められた事は守っていきたくと思います。➤➤➤

## ■米澤穂信『ボトルネック』(新潮社)

22R 谷口るり

「ボトルネック」という言葉を初めて聞いたので調べてみました。「流れ作業の効率が最も悪い箇所」という意味でした。この本は主人公が自分のいない世界にワープする話で、そこにイチヨウの木がよく出てきます。それが「ボトルネック」なのです。主人公が住む世界でも、主人公が存在しない世界でも、イチヨウの木は「ボトルネック」ですが…。話がいろいろなところでつながる、面白いお話でした。➤➤➤

## ■金沢信明『王様ゲーム』(双葉社)

23R 藤田萌江

『王様ゲーム』を読んでみて、もし自分や友達の命が危険にさらされた時、自分はどういう行動に出るだろうかということを考えさせられました。本の中では、自分が助かるために必死になる人や、逆に自分は死ぬかもしれないのに人のために動く人など、様々でした。私がどういう行動に出るかはその時になってみないと分からないけど、人のために動ける人でありたいと思いました。➤➤➤

## ■綿矢りさ『かわいそうだね?』(文藝春秋)

24R 影山奈那美

「本気で人を愛したら、絶望の音に耳をふさぐことなんてできない(本文より)」この本は女性の本音を描いている。綿矢りさの作品はどれもストレートで、深く考えさせられるものばかりだ。どんなに親しくて信頼している人にも、見せられない心の部分は誰にでもあるだろう。でも人を愛したら、その隠しておきたい気持ちと真剣に戦わなくてはならない。私は、何が起きても自分らしく素直でいられる強さを持ちたいと思った。➤➤



●今年度は図書館の貸し出し数が大幅に伸びています。6月25日時点で、3,053冊。昨年は2,010冊でしたから、ずいぶん伸びたことが分かります。この調子で本をどんどん読んでもらいたいと念願しています。図書館ではいい本を入れて待っています。

## ■湊かなえ『贖罪』(東京創元社)

24R 小室双美夏

「納得できる償いを…。」被害者の家族が口にする言葉。なら、償うってどうすればいいの。土下座して泣きながら謝る？たくさんの慰謝料を払えばいいの？それとも、同じ運命をたどって死ねば…？でも、私たちは殺してない。私たちはただ、事件を防げなかっただけ。私たちもまた、被害者なのです。深い意味もない発言が心身を惑わす暗示になり、償いが罪の連鎖を引き起こし人生を狂わす。償うってどういうことなのかな？➤➤➤

## ■瀬尾まいこ『幸福な食卓』(講談社文庫)

25R 岩崎絢加

「父さんは今日で父さんを辞めようと思う」主人公の佐和子さんの家族は他の家族とは少し違います。父さんを辞めると言い出した自殺したことがある父、父の自殺未遂が原因で家を出て1人で生活している母、元天才児の兄。ある時、佐和子の恋人大浦君が交通事故で死んでしまいます。大切な存在の大浦君が亡くなり、佐和子は深く悲しみますが、家族の大切さにも気づかされます。私もこの本を読んで、家族の大切さを改めて実感しました。➤➤➤

## ■太宰治『人間失格』(新潮文庫)

25R 細木祐紀

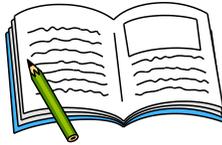
「恥の多い生涯を送って来ました」そんな身もふたもない告白から男の手記は始まる。男は自分を偽り、人を欺き、取り返しよのない過ちを犯し、「失格」の判定を自らにくだす。初めて読んだ時、私と主人公の生きることに對しての価値観が全く違うことにとっても驚きました。また、家族にさえ本当の自分を隠して生きていくのは想像もつきません。人が人として生きる意味を問う作品で、とてもオススメです。➤

## 力作をありがとうございました!

# ★課題図書をお知らせします

▼「第58回青少年読書感想文コンクール全国コンクール」の課題図書は、下記の3冊です。全て図書館に準備してありますよ。ぜひどうぞ。

- 朽木 祥『オン・ザ・ライオン』 (小学館)
- ジャクリーン・ケリー『ダーウィンと出会った夏』 (ほるぷ出版)
- 池上俊一『パスタでたどるイタリア史』 (岩波書店)



(倉表面から続く)

■ 太平光代『だから、あなたも生き抜いて』(講談社)

26R 木島翔子

作者の太平さんは、極道の妻という立場から更正して難関の司法試験に1回で合格し、弁護士とされました。私はよく「どうしようもない」とか「仕方ない」と言って物事を諦めてしまいます。だけど、この本を読んで、本当に無理なことは一握りで何よりも努力が大切なんだということに気付きました。長い人生の中には、「もう無理だ」と思うこともあると思うけど、自分の力で良い方向に変えていきたいです。▶▶▶

■ 小路幸也『Coffee Bluesコーヒブルー』(実業之日本社)

26R 南家タ子

「何もしなかった後悔より自分が引き起こした後悔の方を選ぶ」これがこの本の中で一番すてきだなと思った言葉です。主人公の弓島大は昔麻薬がらみの事件に巻き込まれています。しかし、へんな仲間たちと共に、またも麻薬絡みの事件に関わってしまいます。一度目の時、心に傷を負っているにもかかわらず、上のような言葉が言える大は、心の強い人だなとすごく思いました。私も大のように前向きに生きていきます。▶▶▶

■ 宮脇俊三『時刻表2万キロ』(角川文庫)

27R 金山悠太

時刻表を愛する著者が、当時の国鉄全線走破に挑戦するという内容で、本書ではその旅の終盤が書かれてあります。今は存在しない路線、列車名、また訪れた土地の風景、ハプニングなどが詳しく描かれていました。鉄道好きである私には、当然ながらたまらない内容でした。なかなか手の出にくい分野の本ではありますが、旅の良さ、楽しさがよく分かります。私も旅がしたくなりました。▶▶▶

■ 大江志乃夫『御前会議』(中公新書)

27R 佐々木大輔

日中戦争時から太平洋戦争終結まで、御前会議は日本の国策の最高決定機関であった。しかし、当時の政府、陸海軍、天皇は戦争に対して無責任とも取れる言動や行動が多くあり、御前会議は儀礼的なものになってしまった。私はこの本を読むまで、このような無責任は状態で戦争に突入したと知らなかった。現在、帝国主義の時代について考えることはタブーとされているが、日本の有り様を大きく変えた時代として、正面から考えてみるべきではないだろうか。▶▶▶

■ 上橋菜穂子『獣の奏者 外伝刹那』(講談社)

28R 坂本理緒

「生き物は、誕生を選べないわ。どんな生き物も、生まれ落ちた場所で生きていくしかない(本文より)」私たちは不運が身の回りで重なると「どうして自分がこんな目に会わなきゃならないんだ」と思ってしまいがちですが、そんなときに思い出して欲しい一節です。命や人生にはさまざまな形があり、それぞれに美しさがあることを改めて気づかせてくれるこの本を人生の分岐点に立ったとき、是非手にとってほしいと思います。▶▶▶

■ 武田邦彦『エネルギーと原発のウソを全て話そう』(産経新聞出版)

28R 田中陽祐

エネルギーにはさまざまな考えがある。原発を止めるべきだ、いや何が何でも動かさねばならない、といった意見が世の中に飛び交っている。そんな中、地球温暖化や石油の枯渇、原発の安全性など、数々のウソを暴いたのがこの本だ。金にまみれた大人達の騙し合いに、私達が巻き込まれていいはずがない。この本を読んで、一人一人が「何となく」ではなく、真剣にエネルギーの将来を考えなければならないと強く思った。▶▶▶

■ ヘミングウェイ『老人と海』(新潮社)

28R 長岡和夏

命をかけて何かを追い続ける—私はこんな経験をしたことがありません。この本の主人公であるサンチャゴという老人は、何度も気を失いそうになりながらも魚を追い続けていました。残りわずかな餌にかかった巨大な魚を狙う大群の鯨と、それに立ち向かう老人。たった一人で無数の敵に立ち向かう勇敢な姿に圧倒されました。「大きな海、そこにはおれたちの友だちもいれば敵もいる(本文より)」この本を通して、自然の厳粛さを改めて実感することができました。▶▶▶

## 情報



● チョット耳寄りな情報を。昨年度の読書感想文コンクールの県審査に寄せられた応募総数は10,912編。そのうちの10,797編が自由読書(自分で好きな本を選んで応募)、115編が課題読書(指定された本を読んで応募)でした。この中から予備選考で残った作品が、次のようになりました。

自由読書 121編

課題読書 12編

この中から全国大会に出品する最優秀作品1編が選ばれるのです。どうみても、課題読書の応募の方が有利なことは明らかですね。もうすでに課題図書は発表になっています(上記)から、ぜひ読んでみて欲しいと思います。(図書部)



▲ 松江北高はこの読書感想文コンクールで3年連続で最優秀賞をいただいています。ぜひ後に続いて欲しいものです。

平成23年度 飯塚真由「未来をみつめて」

平成22年度 山本良実「彼女たちが輝く理由」

平成21年度 松浦史奈「『犠牲』と向き合って」